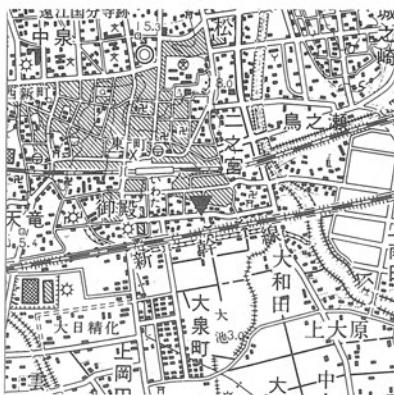


静岡・御殿・一二之宮遺跡



(磐)

- 1 所在地 静岡県磐田市中泉・二之宮
- 2 調査期間 第三四次調査 一九九六年（平8）五月
- 3 発掘機関 磐田市教育委員会
- 4 調査担当者 佐口節司
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代中期～一二世紀、江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

御殿・二之宮遺跡は磐田市街地の南端にあり、磐田原台地の最南縁部である磐田市中泉（御殿）～二之宮に位置する。遺跡の南側には、「大池」を中心とする低湿地帯が広がり、東側を「今之浦」の開析谷が、西側を遠江国分寺跡付近まで開析する久保川に挟まれる。久保川の西方には単弁蓮華文軒丸瓦が出土した古代寺院である大宝院廃寺遺跡が存

在し、北方には遠江国分僧寺・尼寺が造営される。本遺跡は標高一六m付近の台地南端部の広範囲に広がり、遺跡範囲内には小河川が複雑に流れる。中央に流れる谷田川は遺跡を二分し、黒色粘土を堆積する深い埋没谷を形成している。

御殿・二之宮遺跡は弥生時代あるいは奈良時代の主要遺跡として知られる。河川改修や道路建設、個人住宅などの大小の開発行為が進み、これまでに三九件にも及ぶ発掘調査が実施されている。東海道新幹線南側の第一次調査地点では、地名を記した八点の木簡や大量の墨書き器が出土し、奈良時代の国府である可能性が指摘されている（本誌第一・三号）。また、第六次調査では二点の木簡と祭祀遺物が（本誌第一六号）、第八次調査では大規模な掘立柱建物が検出されている。本遺跡の範囲には、江戸時代初期の将軍家の宿泊施設である中泉御殿や、遠江の天領を管理した中泉陣屋（代官所）も置かれている。

本調査地点は、第八次調査地点の南方一〇〇m付近にあたり、谷田川によって開析された谷部の西際の地形変換点にあたる。黒色粘土が東側に向かって厚く堆積しており、同層より弥生時代中期～鎌倉時代の遺物が出土する。特に中位からは六世紀前半～中期の遺物がまとまって出土している。しかし、奈良時代以降の遺物は希薄である。木簡は谷部に堆積した黒色粘土層より単独で出土している。共伴遺物はないものの、奈良時代初期もしくはそれ以前の可能性も

あろう。

8 木簡の积文・内容

(1) 而 □ 祀 □

(81)×25×4 081

上下両端は折損し、文字の摩滅もいちじるしく、墨痕も消失している。文字は表面に残された凹凸によって、四字が観察できる。このうち判読可能な文字は一字目の「而」と三字目の「祀」の二字で、四字目も「而」と読める可能性がある。二字目は偏部（人偏カ）を読みとることができる。文字の間隔からみて元来は六文字が配されていたとも考えられる。

9 関係文献

磐田市教育委員会『御殿・二之宮遺跡 第二八・三三二・三四次発掘調査報告書』(一九九七年)

(佐口節司)

